ヒルネの夢

三浦朱門

産業能率大学出版部

ヒルネの夢

三浦朱門

ヒルネの夢

定価　一二〇〇円

昭和五十五年九月三十日　初版発行

著者　三浦朱門

検印廃止

発行者　小野沢公男

発行所　学校法人　産業能率大学出版部

東京都世田谷区等々力6—39—15

電話東京（七〇四）一一一一

振替　東京〇—四四四〇四

印刷所　東銀座印刷株式会社

製本所　協栄製本株式会社

（乱丁・落丁はお取り替えいたします）

© 1980. Syumon Miura Printed in Japan. 0095—04660—2752

ヒルネの夢

三浦朱門

もくじ

個　性(五)
ニュースの裏(一一)
「公」と「私」(一七)
軍人ぎらいの日本人(二三)
カンの日本人(二八)
器用さ(三四)
人道主義とは何か(四〇)
言葉といたわり(四六)
黄金時代(五二)
不経済(五八)
教育改革(六四)
恐れずおもねらず(七〇)
老人とスポーツ(七六)
テロのおこる国(八二)
合唱と斉唱(八八)
食糧革命(九四)
人命軽視(一〇〇)
日本語の新聞(一〇六)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中国の真の友人（一一二）
変節と良心（一一八）
江川問題（一二四）
政治スキャンダル（一三〇）
平和と戦争（一三六）
商業ジャーナリズム（一四二）
健康法（一四八）
農政はないか？（一五四）
異常気象（一六〇）
二重構造（一六六）
非武装中立（一七二）
福祉と減税（一七八）
マウントバッテン卿（一八四）
絶対主義（一九〇）
受験とカズノコ（一九五）
オリンピックは脱退する
ことに意味がある（二〇一）
情報国家（二〇六）
民主主義（二一二）
健　康（二一八）
最後の夢（二二四）

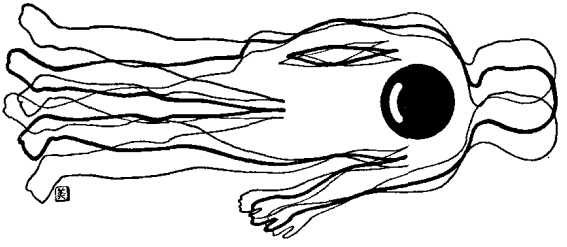
装丁：北澤敏彦
カット：浅見美寛

個性

一

小説の世界で言うと、一人一人が別々の資質を持っていることが望ましいのである。読者はその好みによって、作品と作者を選ぶ。だから、いわゆる大流行作家もうまれるし、生前は地味な作品を書いていて、死後も細々といつまでも読まれる人、生きている時もパッとせず、死んでから全く忘れられる人、太宰のように、生きている時も、死後も華やかな人がいる。

個々の作家はそれなりの自負やあきらめ、時には嫉妬心などを持ってはいるのだが、誰一人として、ほかの人と同じタイプの作品を作りたいとは願わないであろう。どんな僅かであろうとも、自分の持味、自分にしかないと思うものを、大切にし、それを育



てようとする。

小説書きなど、妙な人間ばかりだけれど、この点――自分の個性を尊重し、絶対に他人と同じになるまいとする意図――に関する限り、立派で人間らしいと思う。人間はよく言われるように、一つの歯車かもしれない。しかし、高度に進化した組織では、一つ一つの歯車は取り替え不能のものである。すくなくとも人は、自分という歯車をその組織にとって、かけがえのない物にすることは可能である。

二

十年近く前の大学紛争の時に、某大学のある学科で、二人の専任教員がやめた。五年後までに、その学科では、教授から研究生に至る十名ばかりのスタッフが全員、入れかわってしまった。教員が違うと、カリキュラムの内容にも微妙な変化が生じ、それを補うために、新しい講座が必要になり……、という次第である。勿論、この変化を権力抗争の結果、と考えることもできる。しかし権力抗争自体、人間が規格的な、代用のきく歯車ではないことから生ずるのであろう。どこの会社でも、人一人停年でやめれば、その後をついだ人は、変った個性と能力と方針を持ちこむから、彼をかこむ組織にある変化が生ずる。つまり、人間の作った組織は、金属で作りあげた機械よりも、動植物の有機体に近いので

はないだろうか。

それなのに、近ごろの教育では、生徒や学生を、すべて同じ資質の持主として扱おうとしているように見えるのは、どういう訳だろう。違うのは環境であって、その差がいわゆる「学力」その他の差をうむのだという考えが一部に有力である。落ちこぼれは社会と家庭と学校に責任があるとされる。

私はこの話をほとんど信じない。たとえば、私は両親と姉の四人の肉親の中で、並みはずれて字がヘタである。絵をかこうという情熱を持たない点でも、他の三人と変っている。他の三人は字はうまいと言えなくとも、まず人並みであろう。絵は明らかに水準以上である。子供の時から絵を鑑賞し、絵筆をもつチャンスに恵まれていたが、私は絵をかくようにはならなかった。姉にはプラスに働いた環境が、私にはゼロかマイナスに働いたのは、姉と私の資質の差によると考えるのが至当である。

小学校時代をふりかえってみると、習字については、私は落ちこぼれであった。努力が足らないとか、先生、学友の指導、援助が不充分であったとは思わない。社会は習字を軽視するどころか、国粋主義的な風潮と共に、習字は今よりはるかに盛んであった。しかも私の字は、吉行淳之介に言わせると、とても小学校を出たとは思えない筆跡なのである。

人は一人一人違うという事実、その差は単に指紋の違いだけではないという事実を、あ

るがままに認めるべきだと思う。ただ、その違いを、学校なり、社会なりがどう評価するかは別問題である。

会田雄次氏の「アーロン収容所」に、兵隊の中から自然発生的に出てくるリーダーが、戦時中と、戦後で、三度も変ることが書かれていた。人間のおかれた状況によって、必要とされる能力・資質は違うのである。「学力」が必要とされ、能力を発揮する環境もあろう。たとえば、それは計測しやすいために、学校では順位付けに好んで使われる。しかも今日の社会ではある程度の「学力」的知識と能力は、倫理的、人格的、肉体的、芸術的能力よりもはるかに応用範囲の広いものであるから、なおさらである。

仕事の中でも、「学力」型が必要とされる職種がある。そして、一つの組織の中で、「学力」型――つまり名門大学出――がふえ、その幹部も「学力」型になった時、その組織は巨大ではあっても、逞しい成長力・発展は望みえなくなっているのではないだろうか。従って、学校や教育者は、「学力」型を白眼視したり、クラス全員を、やりようによっては「学力」型にできると言いはる必要はない。これは「学力」を否定するように見えて、「学力」にとらわれている証拠である。運動会で一等、二等を区別することは、教育的でない、と考える方が、非教育的である。

私の姉など、走るのがおそく、徒競走で自分を追いぬいてゆく子のために道をあけてや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るような子だったが、今でも海外旅行に出て旅券をなくしたりしている。しかしそれなりの人柄のよさがあって、こすっからい弟の私より、人に愛されることは確かである。やはり姉は徒競走でビリになることに意味があるので、彼女をつきのけるようにして一等になった子と同列にするのは、むしろ彼女への侮辱であろう。

三

個人ばかりではなく、人種にも、能力に差があるのではないだろうか。これを言うことは人類学者、社会学者――特にアメリカ――の間ではタブーらしいが、オリンピックの短距離の決勝に残るのは、国籍は違っても、アフリカ系のタイプの人が多いのを見ると、肉体的に人種差があるに違いないと思わせるし、また肉体的特色ばかりでなく、精神能力においても、人種による差があるのではないかという気がしてならない。

ただ、速く走れる、リズム感にすぐれている、数量の正確な処理がうまいといった資質はそれだけでは価値ではない。それを価値として、多くの人のために役立ちうるようにするのが文明というものだろう。

今、日本の学校で「学力」型が尊重されるというのは、日本という文明社会では、「学力」型の人間を発見し、利用することに成功したということであって、その他の特色を持

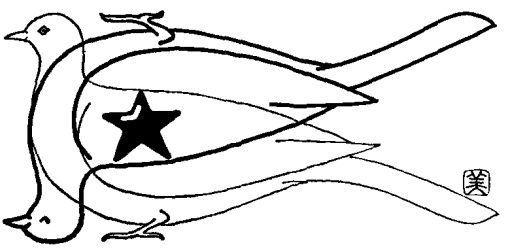
つ人材を発見し、それをのばし、その人格的表現が社会の業績になるような、多次元的な文明を構築すべきなのである。すべての子供を「学力」型に指導できるとか、環境さえととのえれば、すべての子は、碁石のように同じになれる、といった嘘で現実から目をそむけてはなるまい。

ニュースの裏

一

今から十年くらい前、ある雑誌にベトナム戦争のことを書いた。そのころ、ベトナム戦争反対、ということが、化学調味料みたいに濫用されて、メーデーや組合運動のスローガンにまで、きまり文句のように、ベトナム戦争反対、という言葉が使われた。私はそれに対して、賃上げ闘争にベトナム戦争反対は無関係だ、と書いた。

二十日ほどたって、投書が来た。「お前は人間ではない。二児の父より」とあった。多分、ベトナム戦争に反対の、それも熱心な反対者なのであろう。あのベトナムの悲惨さに平気でいられるようなのは人間ではない、と言うのである。しかしそのころ、悲



惨さというなら、インドで何百万人という人が餓死していたし、そのすこし後にはビアフラの内戦で、ある種族が戦いに破れ、殺され、飢え死にし、ほとんど全滅していった。しかし、ベトナム戦争にあれほど熱心だった日本人は、インドの食料不足にも、ビアフラの内戦にも無関心だった。それとも、私を人間ではない、と言った「二児の父」は、自分の家の食費を削り、生活を最低限にまでおとして、インドやビアフラに食料を送ったのだろうか。

数年前、パリ条約ができて、ベトナム戦争から、米軍が手を引くことになった時、私はこれから第三次ベトナム戦争がはじまると書いた。第一次ベトナム戦争はフランスが、第二次ベトナム戦争はアメリカが、それぞれ一枚かんだ戦争だったというつもりである。事実、あれでベトナム戦争が終ると考えた人はほとんどいなかったと思う。それなのに、新聞は——といっても日本の新聞だけだが——平和、平和と書きたてた。平和が来たと、サイゴンの街で若者がツイストを踊ったという記事が出た。また、「勝者なき戦い」という見出しを使った新聞もあった。つまりそういう形で戦いが終ったというのである。しかし平和が来たのはアメリカ社会であって、負けもしなかったにせよ勝たなかったのはアメリカなのであって、サイゴンにいた日本の新聞記者たちは、アメリカ人記者たちのムードに引きずられていたのではないだろうか。

二

私はパリ条約ができたころ、二度サイゴンに行く機会があった。私の会ったベトナム人は誰も平和を信じていなかったし、「北」を恐れていた。あるサイゴン政府軍の高級将校の夫人は、自分の家を要塞のように防備を固めていた。テロを恐れていたのである。サイゴン政府側の勢力範囲はみかけの上では大きかったが、「北」の人が平和な市民を装って潜入してくることを、反サイゴン政府側ではあるが、共産主義も嫌いというインテリたちは恐れていた。

庶民は呑気だった。彼らはどんな政府になっても、よいこともないかわり、悪いこともない。マルクス風に言えば、「失う物は鉄の鎖だけ」と言いたいところだが、鉄の鎖さえ持たない風来坊だから、反共でもないかわり、容共でもない、その日、その日の飯が食えれば結構、といった感じだった。

それでベトナム戦争は終り、ということなのか、アメリカが手を引けば、いずれは「北が勝つ、と見当をつけたのか、日本のベ平連は解散してしまった。しかしサイゴンは臨戦体勢だった。市内の要所要所には、自動小銃の引き金に指をかけた兵士が二十四時間、番をしていた。

私はもうすこしサイゴン政府がもつと思ったのに、二年後には崩壊してしまい、サイゴンはホーチミン市と名をかえた。「南ベトナムは解放された」と日本の新聞は書いた。

それから二年、南ベトナムから、運を天にまかせて、小舟で海にのり出し、自由世界に脱出する人は後をたたない。中には「解放」後の選挙で国会議員に選ばれた人もいる。この時の選挙は誰でも自由に立候補できるものではなかった。従って立候補できたということ自体、この人が「解放」側に容認される人だった、ということである。

また、多くの旧政府関係者、軍の将校は再教育、ということで、収容所に入れられている。そこでは、精神をきたえなおすための、重労働と自尊心をつきくずすための自己批判が行なわれているという。そのことは、香港から出ている、ファー・イースタン・エコノミック・レビューという週刊誌に出ていた。この雑誌のシンガポール特派員が、秘密共産党員で反政府運動をした疑いで、シンガポール政府に捕えられたくらいだから、この雑誌が反共的、ということはないだろう。

とにかく、こういう事件を考えると、ベトナムの「解放」とは、一体、何だったのだろうか、と考えこまざるを得ない。

ベ平連をはじめ、ベトナム戦争反対の運動をした人の中には、反米主義、そして世界にプロレタリヤ革命をおこそうというイデオロギーの持主もいたであろう。しかし、少なか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com